

尾崎先生のこと

和田 久美子

じねんじょ発足間もない頃、尾崎先生と牧野先輩の水無溪谷の調査に同行させていただいた。まだお下げ髪の私には何もかもが物めずらしく、初めて経験することばかりであった。天野先生に「ほんとうの採集家というものが、どんなものかよく見ておくように。」と言われたことを覚えている。この時も、いつものように超ゆっくりペースで、皆さんの荷物がみるみるふくれあがり、それでも手をゆるめずに採集し続ける食欲さに、内心あきれたり感心したりしたものである。

こんなことから、朝私達を追い抜いて登ったパーティが下山してきた時、我々のパーティはまだ4合目であった。懐中電灯で採集し、駒ヶ岳山頂に着いたのは夜8:00を過ぎていた。山小屋は満員であった。食事後、尾崎先生は、先客につめてもらって、何とか私達の寝場所を確保して下さったあと、入口の土間に休まれた。青白い細型の先生が、あんな冷たいところで寝ておられて大丈夫かしら、とその頃の私はただ驚くばかりであった。「心配しないでいいね、尾崎先生はあんな病人みたいにみえるけど、馬力があるんだから」と池上先生が笑いながら言われた。池上先生の言葉の正しさは、その後採集会のたびごとに思い知らされた。尾崎先生の身体のどこから、あの行動力とバイタリティが生まれてくるのか、今だ謎のままであるけれど。

ところで、ご承知のように、じねんじょ合宿の食事は極端な粗食である。荷物を軽くしたいばかりに、皆粗食に甘んじるわけであるが、いつもそこにまばゆいごちそうを追加し、栄養補給して下さるのが尾崎先生であった。ここにもまた、先生のお人柄がそっくりあらわれているように思う。

最近、富山短大の佐藤幸生氏からTelがあり、じねんじょ総会で久しぶりに池上先生・尾崎先生にお目にかかり、お二人が相変わらずファイト満々でおられたのに感心したと話していた。話し方から、お二人の先生にお会いしたことが、彼にとってかなり刺激になっていたのが察しられた。

こしばらく、私もすっかりじねんじょ採集会を失礼し、尾崎先生にお目にかかる機会が減ってしまった。また機会を見つけて、いろいろ教えていただきたいと思っている。幸い、今後は植物資料館におられるご予約と伺い、心強く思っている。先生の益々のご健康とご活躍をお祈りしたい。そのことが、私のような離れている者にとっても、支えになり励ましになっていることをつけ加えて。

(昭和60年5月9日消印)

編集後記 (一部抜粋)

尾崎先生によせられた原稿は、昭和60年(1985年)に発行するはずのものでした。このまま眠らせてはかわいそう、という関省吾先生のお気持ちに沿って、掲載しました。今読むと、タイムカプセルの中の文章のようですから、日付のあるものは日付(封筒の消印)を記しました。

(白崎)

むかご第8巻3号(1993)pp.5~8に掲載(復刻)

古き時代の思いで：平岩の23時間

尾崎 富衛

私が始めて池上先生に面識を得たのは南高校へ赴任した昭和23年であった。翌年の夏休(24年8月5-8日)先生の御供をして始めて自馬岳へ高山植物の採集に出掛けた。一行は先生と私のほか、当時の高校二年生2名(亀井、玉井の両君)の計4名であった。私も白馬がどんな所か殆ど知らず、若さだけがむしゃらに先生の後へつき、胴乱担いで行ったのであるから、今から考えればまことに無茶な話であった。

早朝に新潟を出発して糸魚川で乗り換えたが、その当時の大糸線は小滝までしかなく、煙をあげて小さな汽車が走っていた。駅を下りて河原などを採集しながら歩き始め、

平岩まで来るとトラックが林道を入るので、白池まで乗せてもらった。(この辺までは至極おとなしい山入りであった。白池でナガバノウキミクリを見付け、先生が珍品の説明をされたが、その当時は単に「そんなものかなあ」といった程度の認識しかなかった。

白池からは本当の山道となった。現在と異なり、白馬岳は信州の大雪山側からは登山者も多かったが越後側からは少なく、蓮華温泉に湯治に来る人位であった。そのようなルートを行ったわけであるから殆ど人にあわなかった。今から考えるとその当時から先生はじねんじょが現在進めている新潟県の地域分布の観念を根底に据えて着々と仕事を進めておられたらしい。

ウド沢を過ぎ、八丁坂にかかる頃にはもう夕方近くであった。何とか坂はこえたものの迫り来る闇に「一体これからどれくらい歩けば温泉につけるか」とゆう不安が始終頭

を去来していたが、先生はやはりにこにこしながらペースを崩さず、仏法僧のこだまする一本道をたどり、9時頃ようやく温泉に着いた。初めてのシゴキに心も身体もクタクタに疲れて生徒と共に熟睡したが、ここまでで先生は私の持久力を試されたのかもしれない。

翌朝（6日）起きるとあちこち痛みと疲れが残っているが、生徒に負けたくない一心で荷物を纏めて出発した。トガの森を過ぎ、乗鞍岳への登りにかかる。天狗の庭で今でも記憶に残るのはユキワリコザクラで、ここから本当の高山植物が現れて来ると言うので、すっかり有頂天になっていた。去年苗場のお花畑は見ていたが、本式の高山植物を見るのは殆ど始めてではなかったかと思う。「今日は白馬の頂上まで行きたいが、随分先生のペースが悠然としておられる。果たして行き着けるのかしらん」と考えているうちに乗鞍の大池へ着いたが、その時には既に時計は午後6時をさしていた。こうなると何となく度胸が坐って来て、池ノ瑞でゆっくりと紙換えをし、小蓮華の稜線へ出た。月は東から登り始めてあたりは簿明るく、時計は8時をさしている。かなり寒くなって来たが、生徒二人も意外に元気で、さながら雲上に行く仙人のような気分で9時半頃白馬の小屋に着いた。仕事は昼間だけやるものと思い込んでいた頭に先生が月明かりで採集をしておられるのを始めてみてショックを受けたのもこの時からだったと思う。疲れた身体で部屋へ上がり、畳が敷いてあるのやギターの音が聞こえるのに「これが三千メートルの山小屋か」と感心しながら翌朝早いことを告げられ、深い眠りに入った。

翌日（7日）6時、屋外に出ると2933メートルの頂上はさすがにかなり寒い。震えながら稜線を歩き始めた。今日も晴天らしく、眺望が素晴らしい。日が上るとすっかり気分も爽快になって、岩礫地のお花畑の採集をしながら歩いていたが、この時にはまさかこの日が我が生涯最大の思いでの日になるうとは知る由もなかった。いい気分で採集をしながら稜線をしばらく歩いていると、向こうから呼び止めている者がある。しかも何かこちらを見とがめている様子である。だんだん近付いて見ると高山植物の監視人の親玉で、さっきから我々の行動を双眼鏡で監視していたらしい。例の通り池上先生少しも騒がず、ニコニコしながら懐から採集許可証を出して見せ、我々は荷物運搬助手とゆうことでことなきをえた。しばらく話をしている内に以前一度あった事があるそうで、すっかり打ち解けてしまい、何を採集しても構わないから小屋へもう一晩泊まって行かないかとの話になったが、先を急ぐので別れた。

同じ道を帰るのだから帰り道はあまり採集されないだろうと思ったのはトウシロの浅ましき、行きと同じように、いとも丁寧に手間と時間を掛けているのだから早く歩ける筈がない。乗鞍大池に着いた時には既に太陽が傾きかかっていた。これでは今日は温泉泊りの外はないと勝手に心に

決め、暮れかかった道を下り始めた。其の頃には私の荷物はリュックの上に縛って乗せた標本の束が重く肩に食い込んでいたが、それにも増して先生の荷物は山となったりリュックの外に、両肩から紐でたすきにして両側へ下げた標本の束と、同じものを両手にぶら下げており、とても常人の歩ける格好ではなかった。

確か8時を過ぎた頃だったと思う。ようやく温泉に辿り着き、やれ嬉しやと思ったら先生いわく、「明日午後からどうしても学校に用事があるので朝一番の汽車に乗らねばならない」。これには私も心臓をどづかれたようなショックをうけたが、当時何も乗り物のない時代の、しかも真夜中にどうやって小滝まで行き着くのか。「まあゆっくりと歩きましょう」と例のニコニコ顔で事も無げに言われ、私もなるようになれと、かえって腹が坐って来た。

温泉を出ると月が中天に上り、仏法僧の鳴声が谷間にこだましている。しかし立ち止まって腰を下ろすと眠気が襲ってくるので絶対に大休止は出来ない。しばらく歩いている内に生徒がふらふらと横に揺れて歩くようになって来た。後から見ている私は思わず気合いを掛けて目を覚ませ、同時に自分も空気を付けていた。12時を回ったのは八丁坂の中途あたりだったかも知れない。月明かりに白池の水面がくっきりと光っていたのが印象的であった。自動車道路を下り、木地屋の部落を過ぎ、大所川の水音を左に聞きながら平岩に着いた時には私も真っすぐに歩くのが困難になって来た。生徒は時々押さえてやらないと道路側の崖から姫川へ転落しそうである。平岩から小滝の間の平岩よりの所に3ヶ所程のトンネルがある。そこまで来て始めて先生が「少し眠りますか。」と言われた時には時計は午前5時をさしていた。実に朝から23時間を歩いたことになる。しかしそんな感慨に浸る間もなく、トンネルの瑞にシートを敷き、崩折れるように眠りこけてしまった。

随分たったように思ったが、眠りの中で何か馬の蹄の音を聞いたように感じて目が醒めた。時計を見ると朝の6時、大分眠ったように思っても僅か1時間である。音のしたと思われるトンネルの入り口の方を見ると、馬方に引かれた馬車馬がトンネル内の異常な様子に驚いて入り口に止まったまま動かない。あわてて熟睡している生徒を揺り起こし、音でトンネルの片隅へ避けたら漸く馬が動きだした。我々もそれから荷物を纏めて歩きだしたが、1時間でも寝ると人間は活力が出て来る。当時先生は39歳、私は24歳、若さの時代であった。汽車の時刻は7時00分、平岩？小滝間は5キロ程ある。今までゆっくり歩いていた先生が次第にピッチを上げて来た。遅れてならじと、一同必死でついて行く。先生のスタミナが後になる程現われて来るのは周知の事実だが、これは昔から既に備わっていたものらしい。駅の1キロ程前になって、遂に間に合わないと言う事で走りだした。通り過ぎる朝の歩行者がチンドンヤ

の一行を呆れて見ている。こうなるとやけくそである。何か別の力が授かったように生徒も走ってゆく。道路の最後の曲り角を曲がると駅のホームが見えて来た。汽車は正に発車しようとして駅長が時計を見ている。「待ってくれー」と大声をあげたら駅長が気づき、発車を待ってくれたので、一同は切符を買う暇もなく最後尾の箱に飛び乗り、座席にヘタリこむと同時に動き出した。「これで学校に間に合う」。先生の言葉を最後にそのまま一同は死んだようになって眠りこけた。

この話はじねんじょが出来る遙か前の事で、こんな事が後に入会の際の試験問題の一つだなどとまことしやかに語り伝えられたのかも知れない。

あれから40年、今ではじねんじょの採集旅行も全く近代化され、たまねぎの味噌漬けなどは誰もやらなくなり、共同装備もかなり充実したものとなって来た。山へ行くにもすべて自家用車に分乗して山麓まで横付けし、温泉地を通らなければ嫌だなどとささやかれる始末、まことに隔世の感がある。

若い人が少なく、平均年齢が1年毎に増してゆくじねんじょは、これからどのように歩いて行くのだろうか。

(何しろ40年まえの事であり、多少のフィクションはお許し下さい) (1990, Mar. 14)

むかご第9巻1号(1992)pp.11~17に掲載(復刻)

杵差岳植物採集記

尾崎 富衛

(次の文章は昭和29年夏、池上先生をご案内して登った杵差岳の採集旅行について、昭和30年発行の「越後山岳」第5号に登載した文で、今回これを一部手直しし、再録したものである。

(記:尾崎 1993. 4. 1)

五年ほど前のことである。筆者が新潟県の山の元老藤島氏に「高山植物が豊富で経費のうんと安い山」と訊ねたら、言下に教えられたのが杵差岳であった。最初登ったのは昭和廿五年である。その時は鉄道から離れているので入りにくいように思ったが、以来五回の採集旅行を試みて、その度毎に此の山に益々無限の懐かしさを覚えてゆくのである。このように同じ山へ何回も登った事は、小生の山の経験では全くないことである。この山の何が一体こんなに人の心を引付けるのであろうか。一つは山の不便さが却って自然をそのまま保たせ、妄りに人の暴力を許さぬ為かも知れぬ。何はともあれ小生にとっては洵に忘れ難い山で、紹介して下さった藤島氏並に山で御指導を賜った県立南高校の池上義信先生の御厚志に対して敬意を表するものである。

大熊小屋迄

岩船郡関川村の南、最奥の部落大石の村外れの観音堂が筆者の毎度御厄介になる休息所である。ここで昼食をとり池上先生と二人で二時頃出発した。森を抜けると河岸段丘

が開け、それを過ぎると大石川本流に架かっている跳石の吊橋にかかる。ここ迄の植物は平凡であるが、橋の袂にキタゴヨウの二三本並んでいるのが目につき杵差へ来たなという感じを起させる。この木はこれからのコース中に、少数の杉林を除いて針葉樹の殆ど見当たらない中であって、只一つの代表的な針葉樹といってよいからである。橋を渡って左岸に移ると僅かの杉林が続く。そして越後北部の山裾ではどこでもそうであるが、杵差も特にユキツバキが多く、この辺からすでに藪となっている。結実期には他所からも採集にきて、俄に何俵もかついで行く事もあるそうだ。間もなく東俣川の出合いが対岸に見られる頃、滝倉沢にかかるコンクリートの小橋を渡る。ここまでの代表的な植物を挙げるとヤマブドウ、アケビ、モミジイチゴ、ユキツバキ、コナラ、ホツツジ、ケトチノキ、ウワミズザクラ、ウリハダカエデ、ムシカリ等がある。沢の対岸を登ると足下には、イワナシやオオイワカガミが艶のある葉をつけている。路の傍の崖には、初夏にはサイゴクミツバツツジがあり、盛夏にはオオコメツツジが咲いているし、水の滴り落ちる崖にはキンコウカが根を張って金色の光を放っている。次々と小沢を越えたり、段丘を通過したり、崖を搦んだりして路は山腹を縫ってゆく。やがてイズクチ沢にかかる。採集者にとってはこうした深い沢の登り降り急崖となっているのでかなりきつい。風化の進んだ花崗岩がずっと露出しており、軟いのでひやひやする。喘ぎながら登りつめると落雷で枯れたらしいキタゴヨウの幹が四五本どこからも目につきやすいように立っている。この五葉ノ峰から初めて杵差本峰が指呼の間に姿を現してくる。そこを下るとブナの原始林が始まってくる。落葉を踏んで歩くブナ林の静けさは何ともいえない。十貫平のブナ林に幾つかの